

仰木御所山のお火焚き

加藤
賢治

仰木御所山のお火焚き

Title :

Ohitaki at Ogi-Goshonoyama

Summary :

Ohitaki is a traditional event held in Ogi-no-Tsujigashiata, Otsu, Shiga in which the children of the area participate. In this paper I will examine the elements and nature of the event and shed light on its purpose and meaning.

はじめに

大学が位置する大津市仰木地区は、千年以上の歴史を誇る神社や祭礼行事があり、様々な風習が今も守り続けられている。そのような中でも、「講」と呼ばれる一つの共同体が「行者講」「観音講」「地藏講」「愛宕講」「汁講」「日待講」「元三大師講」などと呼ばれ複数存在する。このように例えとして挙げた「講」の数々は仰木地区の一軒の旧家に伝わる「講」であり、実際に現在でも年中行事として日が決められ、各講独自の行事が行われている。各講には当番の家が決められており、当番にあたっている家に講員が集まり行事が肅々と遂行されるのである。

講とは、元来仏教儀礼の中で産まれてきた教団の中における信仰集団であるが、近世には山村や農村の地域社会の中で、民間信仰とともに、地縁的、互助的な共同体としてその役割を果たしてきた。二十世紀の急激な近代化によって科学の発展が神の存在を危うくし、水道やガス、電気等のライフラインの整備が進められ、病院や学校等の公共施設が整えられる中で、徐々に地域の繋がりの重要性までもが薄れていった。その結果として、「講」はその役割を終え、全国各地で消滅の一途を歩むこ

加藤 賢治

とになったのである。

しかし、一方で都会からあまり遠くないこの大津市仰木地区には、いつ頃始まったかわからないという多くの「講」が存在している。丁寧はその伝統行事を検証することで、役割を終えてしまったといわれる行事の今に生きる役割が見えてくるかもしれない。

今回の論考では、「御所山のお火焚き」（「講」とは呼ばれていない）という子どもが主役となる伝統行事を取材し、その役割について考えてみたい。

一、「御所山のお火焚き」

大津市仰木辻ケ下には毎年十一月三日に行われる「御所山のお火焚き」という伝統行事がある。

大津市仰木地区は、上仰木、辻ケ下、平尾、下仰木の四つ地区に別れ、まとめて四箇村と総称されている。「御所山の山のお火焚き」は、そのうちの辻ケ下地区でのみ行われ、他の地区に見ることはできない。その辻ケ下地区は東町（ひがしまち）と西町（にしまち）というグループ（辻ケ下の共同墓地のお墓の場所を基準に東西に別れている）に別れており、この両町で「御所の山のお火焚き」が行われる。

平成二六年十一月三日、筆者は西町の行事を取材した。西町は三三戸の家で構成されており、各戸の小学一年生から六年生

の子どもたちが主役となる。参加した小学生は、次の四名。いずれも男子で、女子の参加は伝統的に認められていない。また小学生の保護者として父親や祖父がそれぞれ引率した。

桐山倫太朗さん 仰木小学校五年生

中井智大さん 仰木小学校五年生

今井陽斗さん 仰木小学校四年生

今井俊太さん 仰木小学校二年生

引率者

中井徹さん（桐山さんの祖父）

北村耕三さん（中井さんの祖父）

今井直基さん（今井陽斗さん、俊太さんの父親）

お火焚きの日の早朝五時、まだあたりは真っ暗である。西町の小学生四名が目をこすりながら集合。西町（三三戸）で小学生が四名というのは少し寂しい気もするが、その四名の保護者が付き添って伝統行事ははじまる。

子どもたちは、原則、西町の全戸をまわる。ただ、事前に申し出のある家については、この日に訪ねることはしない。この日は実際に二七戸を廻った。

子どもたちは各戸の玄関で「お火焚きの藁おくれ」と大きな声で呼びかける。するとその家の人が「おはよう。よう来てくれたね」といいながら封筒を一つ渡してくれる。かつては、本当に藁の束が渡され、その藁束を売って、お金に換えていたと



おばあちゃんが外まで出てきてくれた



街灯と懐中電灯の灯りをたよりに町内を歩く



お小遣いが入った封筒を手渡される



玄関先で「お火焚きの藁おくれ」と子どもたち



各戸を廻り終えて御所の山へ到着。夜が開けてきた



お火焚きの碑文の前で藁を焼く

いうことであるが、今はその封筒に五百円から千円（四人で割ると一人あたり数百円になる）のお小遣いが入っている。全戸まわると結構な金額になるので、子どもたちにとっては大変うれしい行事でもある。

「お火焚きの藁おくれ」という子どもたちの声は、何とも郷愁を覚える心地の良い響きに聞こえた。また、驚いたことに、子どもたちは複雑な路地を迷わず懐中電灯をたよりにさっさと歩く。確かに小学五年生の子どもは今年で五年目であるから、完璧に各戸の場所を覚えていて当然かもしれない。そして、訪ねられる家の人々も毎年この日にやってくる子どもがどの誰であるかしっかりと覚えていられるであろう。また、引率した保護者と「悪くしていた足は治ったかいな」「まだようになってへん

から外に出てへんわ」「外に出るようにしな治らへんで」というような会話（コミュニケーション）も見られた。

はじまって約一時間半、子どもたちが全戸をまわり終わるとすっかり夜が明けていた。最後は全員で御所の山に行く。そこには、下記のような「お火焚き」の解説文が明示された記念碑があり、その前で実際に保護者が持参した藁束を焼いて般若心経を唱えて祈りを捧げるのである。

お火焚き顕彰碑全文

御所の山のお火焚き

御所の山は、仰木庄の領主であった多田源氏の源満仲の館跡と伝えられています。満仲は、天禄二年（九七一）に摂津多田（兵庫県川西市）から仰木の地に來住し、十余年間を過ごしました。そして、比叡山横川の恵心僧都に帰依し、居館を、紫雲山來迎院満慶寺と称して信仰を深めるとともに、善政をしいたことです。真迎寺域内に祀られている薬師如来像は、恵心僧都の御自作で満仲公の念持仏であったといわれています。

ここ御所の山には、その供養塔が建立されていますが、辻ケ下では、古くから、この塔の前で「お火焚き」とよぶ伝統行事をおこなってきました。毎年十一月三日の早朝に、辻ケ下の数え年七歳から十五歳までの男子達は、字内の各

戸から新藁を集め、これを売って御供物を買ひ、満仲の塔に供え、藁で火を焚いて、お参りします。

お火焚きは、先祖の霊を招き新穀を供える年中行事に関連したものといわれています。御所の山のお火焚きも、郷土仰木を愛し、育ててくれた満仲の遺徳を偲び、その霊に對し一年の収穫を無事終えた感謝の意をこめてお祈りしたことにはじまったものと考えられます。

光明山真迎寺開山壹千年記念
平成二年十一月踐祚大嘗祭の年

辻ケ下 東町 西町 真迎寺



みんなで記念撮影

二、仰木御所の山の歴史と伝承

御所の山は、源頼朝や義経、足利氏、新田氏、武田氏、徳川氏など日本の歴史を動かした著名な武士を輩出した清和源氏の祖といわれる源満仲（九一二～九九七）の居宅があった場所であるとされている。

満仲は、摂津国多田荘を納める武士団の棟梁で、今昔物語では、満仲の子（九男）で僧侶の源賢が比叡山横川の恵心僧都源信をたよって、殺生を繰り返す武将である父を出家に導いたと記されている。

仰木では、その満仲が十一年間ここに住んだといわれ、満仲が摂津多田に帰る際に、仰木四箇村が争うことなく平安であるようにと五基の御輿を喜捨し、それが仰木祭の起源となったと伝えられている。仰木祭のクライマックスである馬駆けの中の「馬止め」という所作は、村人たちが村を去る満仲を止めようとする姿を現しているといわれている。

また、仰木にとって聖地である御所の山には、元禄六年（一六九三）八月の銘が彫られた石碑がある。銘は当時仰木の領主であった賀子内親王の家臣小倉重庸が建立したもので、かつてここに安置されていた源満仲の霊像（満慶像）が小椋神社に移され、荒れ果てていた満仲の遺跡（満仲旧宅跡）である御所の山の場所を、後世に伝えるためにその場所に石碑を建て書き記したと伝えられている。



仰木御所の山満仲遺跡碑



仰木御所の山満仲遺跡碑部分

仰木御所の山満仲遺跡碑

滋賀軍仰木邑有源満仲祠居民傳云
満仲近江守任食采此邑後因奉像於

茲然山郭蔭湿祠宇朽廢遷像異地重

唐竊恐舊基永沒謀之同僚樹石以表其攸云

元禄六癸酉年秋八月 日

女五公主 元臣 小倉督重庸

仰木の地は、近世以来豊かな穀倉地であった。当時、後水尾天皇と幕府の間で「紫衣事件」等の対立紛争が起こっており、それらの融和策として、延宝六年（一六七八）から元禄九年（一六九六）まで、豊かなこの地が皇室領（関白一条光平の正

室賀子内親王領」とされていた。

家臣小倉重庸は、祭りの祭神として尊崇し、村人たちの誇りとなっている源満仲が仰木に暮らしていたという伝承を重要視して、その伝承が風化しないよう石碑を残した。現代にいたっても、源満仲が仰木に暮らしたという事実を明らかにする文献等の資料が見当たらない中で、少なくとも江戸元禄期に、仰木の村人たちが、かつて満仲がここに居を構えたていたと信じていたことをこの石碑は証明している。

三、お火焚きの役割（むすびに変えて）

お火焚きは一年の収穫を無事に終えた感謝の意をこめた祭礼の名残であるといわれているが、いつ頃から行われていたかはわからない。引率した祖父や父親もこの行事を行っていたとのこと。当時は十五名ほどの子どもたちが六年生のお兄さんたちについて各戸を廻り、お小遣いを分配してくれたそうである。



最後にお小遣いを分ける子どもたち 学年に関係なく平等に分けられた

たちが生活する空間をしつかり結び、子どもと大人、子ども同士をつなぐ大切な機能を持っているように感じた。

また、小倉重庸が記した「仰木御所の山満仲遺跡碑」の前では、引率者の大人たちが丁重かつ厳肅にお供え物をしてお神酒をあげ、般若心経を唱える。それを子どもたちは眺めることで仰木が持つ奥深い歴史を感じているのである。石碑は、仰木という集落が他の地域には見られないような、歴史上重要な人物の伝承を伝え、子どもたちは毎年その歴史や伝承を学んでいるのである。

この伝統行事は、かけがえのない大切な役割があるからこそ、無くならずに伝えられてきた。

満仲が本当にこの仰木の地に住んでいたのか、また、いつ頃からこの行事が行われてきたのかという歴史的な事実とは別として、長い年月の中で伝えられてきた伝統行事にはその地域にとって欠くことができない大切なメッセージが含まれているのである。



御所の山満仲遺跡碑の前でお供えをして、歴史を学び、お経を読む

参考文献

- ・小栗栖健治『宮座祭祀の史的研究』（岩田書院 二〇〇五年）
- ・加藤賢治「村座と祭祀―滋賀県大津市仰木地区の例―」（近江地方史研究第四号 二〇一〇年）
- ・加藤賢治「宮座の祭祀―今堅田に伝わる祭祀 野神祭りに見られる現状―」（成安造形大学附属近江学研究所紀要1号 二〇一二年）
- ・加藤賢治「古式祭祀に見るコミュニティとそこに展開するコミュニケーション―大津市今堅田一丁目の愛宕講と地藏講を中心に―」（成安造形大学附属近江学研究所紀要3号 二〇一四年）
- ・桜井徳太郎『民間信仰と現代社会―人間と呪術―』（評論社 一九七一年）
- ・岡田昭吾編集『仰木の古代よりの略年次表』（二〇〇三年）
- ・大津市史編纂室 新修大津市史第七卷「北部地域」仰木

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第4号

発行日 平成27年3月23日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2015

ISSN 2186-6937